

ロマン主義と世界史の展望

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣瀬, 友久 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6093

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



ロマン主義と世界史の展望

廣瀬友久

はじめに

以下の論で展開を試みるのは、ロマン主義と世界史の関係をめぐる考察であるが、この考察は二つの面において進められてゆくこととなる。その一つの面とは、当然のことであるが、ロマン主義が世界史の中の出来事であった、あるいは今でもあるということであり、その考察は「世界史の中のロマン主義」という設定の中で展開することとなる。もう一つの面とは、世界史を見通すことができるような思考の枠組みをもった精神が、ロマン主義の中で初めて形成されたということであり、それをめぐっての考察が本論のタイトルである「ロマン主義と世界史の展望」という設定の中で展開することとなるのである。

上記の二つの面の内、前者について、既にこれまで行った考察から、ここで予め仮説を述べておくとする、それは、ロマン主義が、近代化という歴史の流れがある段階に達したときに出現する精神の形であり、その精神の中でこそ、今日私たちが自明なものに見做している近代文学や近代芸術、そして近代科学までもが成立するというものである。さらには、この精神の出現があって初めて、近代化という歴史の流れは、近代国家の成立に不可欠な国民意識の醸成という段階に至るといえるものである。

次に、後者についての考察の見通しを述べておけば、それはまず、近代文学、近代芸術、そして近代科学を成立させる精神の形は、近代化において顕在化してくる自己と客観世界の対立を克服できるようなある装置をもって形成されるということである。そして、この装置があって初めて、世界史を展望する眼が開かれることになり、さらにその展望の中においてこそ、国民意識の醸成が可能となるということである。

本稿においては、その装置を広い意味での遠近法と捉え、それが、時空間の外に立って、全く客観的な基準に従って世界を見通すことを志向する精神

的態度に基づいて形成されるものであると考えて、その形成過程を歴史的に解明することを試みる。

I ロマン主義と遠近法

ロマン主義の精神の形が、世界史の中で初めて明確な姿で現れたのは、18世紀末から19世紀にかけて、イギリス風景画とイギリス・ロマン派の詩の中においてであった。ここではまず、1798年にワーズワースとコウルリジが出版した *Lyrical Ballads* において、イギリス詩におけるロマン主義の表現がいかに確立したかを検討することとする。

Lyrical Ballads の序文では、新たな詩的言語表現の確立を目指すことが宣言されているが、それがどのようなものであったかを、ワーズワースの有名な 'Tintern Abbey' のタイトルと第1連から考えてみることにする。

LINES WRITTEN A FEW MILES ABOVE TINTERN ABBEY,
ON REVISITING THE BANKS OF THE WYE DURING A TOUR, *July*
13, 1798.

Five years have past; five summers, with the length
Of five long winters! and again I hear
These waters, rolling from their mountain-springs
With a sweet inland murmur. — Once again
Do I behold these steep and lofty cliffs,
Which on a wild secluded scene impress
Thoughts of more deep seclusion; and connect
The landscape with the quiet of the sky.
The day is come when I again repose
Here, under this dark sycamore, and view
These plots of cottage-ground, these orchard-tufts,
Which, at this season, with their unripe fruits,
Among the woods and copses lose themselves,
Nor, with their green and simple hue, disturb

The wild green landscape. Once again I see
These hedge-rows, hardly hedge-rows, little lines
Of sportive wood run wild; these pastoral farms,
Green to the very door; and wreathes of smoke
Sent up, in silence, from among the trees,
With some uncertain notice, as might seem,
Of vagrant dwellers in the houseless woods,
Or of some hermit's cave, where by his fire
The hermit sits alone.

これを読んで 21 世紀に生きる私たちが感じることは、ここに詠まれている世界が実在するものであって、その世界に違和感なく入ってゆくことができ、詩の中の「自分」と同じ感情をもつことができるということである。それは、作者がこの作品世界を客観的実在として構成しようとしているからであり、そのために作者が依拠している装置が、私たちが共有できるものであるからに他ならない。

まずこの作品では、作品の中に詠まれている「自分」のほかにもう一人の自分が語り手として存在しているが、その語り手は全く隠れていて姿を現すことはない。それは、語り手が、時間的にも空間的にも世界の外に立っており、そこから観察したことを「いつ、だれが、どこで、なにを、どうした」という、あるいは「なにが、どうである」という、事実の報告の形をとって記述するという表現の形式を取っているからにほかならない。この、世界の外に立って、価値判断を交えず、客観的基準に従って世界を客観的実在として構成するという表現法、それを可能としている装置を、ここでは広い意味での遠近法として考察を進めてゆくこととする。

このワーズワースの作品は、二つの遠近法の形式が組み合わせられて、上記のような表現が成立していると考えられる。それは時間の遠近法と空間の遠近法である。まず、日付のあるタイトルと出だしの句から、私たちは、この作品世界の時間は、人間世界の出来事の背後を、無限の過去から無限の未来へ均質に流れる時間であると感じとることができる。また、1798 年という、激動の同時代にあって、歴史的意味の希薄な年号が選ばれていることによっても、このような時間感覚は強化されているのである。

作者はさらに、人間としての価値判断を呼び起こしやすい要因を、作品世界から極力排除している。ここでは、果実はまだ収穫の時期ではなく、生け垣は生え放題で、人家は戸口まで緑に覆われている。人の気配といえるものは、木の間から昇る煙のみであるが、そこから想定される人物は、世俗の価値から隔絶された隠者か浮浪者なのである。ここでは人間を思わせるものは、すべて自足した自然の営みの中に、従って人間世界の出来事とは無関係に、自律的に均質に流れている時間の流れに埋没させられていると言ってよい。このような時間の流れの感覚を喚起する表現を可能にする装置、それが時間の遠近法なのであり、それは、時間の流れの外の一点に立って、無限の過去から無限の未来へと均質に流れる時間、つまりニュートンが定義したような時間をイメージすることで成立する精神の装置なのである。

一方、空間の遠近法は、このワーズワースの作品において、時間の遠近法を成り立たせる前提として機能している。それは、世界の外に立って、世界を無限で均質な空間としてイメージすることで成立する装置だからである。この装置によって描かれたこの詩の空間は、閉ざされた谷合でありながら、川の流れの描写によって遙か上下流がイメージされることで、また谷合の風景が閉ざされているながら「空の静寂」と結び付けられることで、この谷の外に無限の空間が広がっていることを、読者に暗黙のうちに意識させているのである。そして、ティンターン・アベイという濃厚な意味をもった場所が意図的に避けられていることも、同様に機能していることは言うまでもない。

時空間の遠近法の装置をもって構築された、この'Tintern Abbey'の第1連のような世界に対し、私たちはそれが客観的に存在することを疑うことなく、しかもその世界と一体化できると感じるができるのであるが、そこから取り出すことができるロマン主義の精神の形とは以下ようになるであろう。それは、世界の外に立って、それに対してある距離を置き、価値判断を差し控えた姿勢で臨むという、カントが定義した美学的態度に他ならない。それは世界を風景として観る精神的態度であり、この態度により、人は対象となる世界の客観的実在性を信じ、その中の人々に対し、利害を超えた一体感や共感を覚えることが可能となるのである。また、その世界を前にして人は、カタルシスを覚え、帰属意識をもつことができることになるのである。そして、このような帰属意識こそ、近代国家の形成において、国民意識の醸成の基礎となるものであった。

今日でも私たちは、何かに実在性を感じたり、他者と心の底からの共感を覚えたり、何かを美しいと感じたりするとき、実は知らず識らずこの態度をとっているのである。しかしそれは自明でありすぎて自覚されることはない。私たちはすでにこのような精神的態度から逃れることはできなくなっているが、それが形成されてきた歴史的経緯を解明することはできるであろう。

Ⅱ ルネサンスと空間の遠近法

前章では、ロマン主義の精神の形成が遠近法の成立を前提としており、その遠近法には時間の遠近法と空間の遠近法があることを明らかにした。本章では、まずルネサンスにおける空間の遠近法の成立の精神的意味を、中世から近代への歴史の流れの中に置いて考えてみたい。空間の遠近法の成立は、ルネサンスの精神の形成と不可分の関係にあるからである。

ルネサンスの精神の形成に関して、塩野七生氏は『ルネサンスとは何であったのか』の中で、アッシジの聖フランチェスコと、神聖ローマ皇帝（シチリア王）フリードリッヒ2世が重要な役割を果たしたと指摘しているが、その意味を理解するには、まず西洋中世がどのような世界であったかを考える必要がある。西洋中世は、共同体を基底に置く身分社会であり、その社会構造と一体化してこれを支える、神を頂点とした階層秩序の世界像が、天使から無機的物質に至るすべての存在者に存在意義を与えていた。各身分にある人々は、その身分の本質を実現し、身分を全うすることによって、神の創造したこの秩序の維持に与ることにおいて永遠の生を保証されていた。各身分の人々の生活は様式化され、一日において、一年において、そして一生においてなすべきことはすべて決められていた。従って、このような階層秩序の世界に生きる人々にとって重要なことは、個として存在意識をもつことではなく、自らがこの階層秩序のどこに帰属しているかを知ることによって、その秩序を維持してゆくことであったと考えられる。

中世のスコラ学の目的は、このような階層秩序の世界像を正確に表現することであり、神を頂点とした各階層の存在者の本質を概念として把握し、その概念の組み合わせから普遍妥当な命題を導き出すことであった。従って、アリストテレスの三段論法を中心とした概念の論理学がその内容の主たるものになるが、その普遍妥当性は大前提となる命題が、神という最も普遍的な

存在の本質と属性を表すものであることによって保証されていた。それは今日の眼には、あらかじめ真理を保障されたトートロジーの空しい列挙ということになるが、中世の世界像の中では、普遍者の間の関係こそが実在の表現であったのである。当然この世界像では、神の定めた普遍が個に先立って存在していたのであり、身分という普遍は個人に先立って実在していたのであった。

中世において絵画に相当するものは、それが教会の祭壇画であれ、ステインドグラスであれ、モザイクの壁画であれ、遠近法による画面構成は取られていない。それは、中世の絵画における図像は対象を描いた画像というより、普遍的理念の象徴であり、絵文字や象形文字に相当するものであったからであり、個人がそれを見ているような距離感を出すことは意味が無かったからであった。そこで重要なことはコードに基づいた象徴の平面的配置であった。であればこそ、世界秩序の中でのコードの共有により、中世の図像は豊かな象徴的意味を担うことができたのであり、礼拝の対象となりえたのであった。さらに中世の普遍者の階層的秩序の中では、普遍者であるアイデアが霊的な実在であったことを考えれば、中世の図像のもつ象徴としての実在感、そこに霊の現前を感じ取ることができる実在感であったのである。

上記のような中世の階層的秩序と階層秩序的世界像は、それらを成り立たせている世界システムの外に立って、これと向き合い、システムそのものより個物に眼が向くような精神的態度をもった個人の登場によって無化され、やがて崩壊に向かうと考えられる。そして、そのような精神的態度は、まず商業に従事する人々に現われると考えられるのであるが、それは特に西洋中世の世界システムと東方世界の世界システムの間で活動していたイタリア商人に顕著に現われたと考えて不思議はない。塩野氏が指摘する、聖フランチェスコとフリードリッヒ2世の、ルネサンス精神の形成での役割はこの文脈で考えれば理解できるのである。

塩野氏によれば、聖フランチェスコの考えた教会改革は、法王庁の超越的権威は認めつつも、神の救済の前の、聖職者間、信徒間、聖職者と信徒間の階層性を否定し、どの道に向かうかは個人の選択の問題であるとしたことにある。そして、聖職者の清貧を励行する一方で、教会への寄進を前提に信徒の商業活動を奨励し、日常は商業活動に従事できる修道士の会をも組織したのであった。また、フリードリッヒ2世は、通貨の改革を行い、異なった世

界システムの間で流通しうるハードカレンシーとしての新たな金貨を発行した。またナポリに大学を設立して東西の異なった世界システム間の文化交流を図り、一方で西洋中世世界システムを支えたラテン語に代わる、イタリア語による表現を向上させる改革を行ったのであった。

以上のような、聖フランチェスコの思想と活動、フリードリッヒ2世の政策は、いずれも西洋中世の世界システムを、その内部にあって普遍的なものと見做すのではなく、他の世界システムとの間に立つことで、個人が、全世界を対象として、それを個人との距離を基準に視野に取り込んでゆくという精神的態度の成立を助長促進するものであったことは疑いない。空間の遠近法はこのような態度から生まれるものであり、宗教画であっても、信仰対象を教会システムの中のコードに基づいて象徴的に表わすのではなく、個人が、無限の空間を背景としてある実物を見ているように描くという、異なった世界システムにおいても理解されるような、より普遍的な表現法であることを狙って成立したものと考えることができる。そして、空間の遠近法の最初の実践者であったジョットーが、「イエスも私達と同じ人間」という聖フランチェスコの教えに基づいて「哀悼」や「磔刑」を描いたことも理解できるのである。

14世紀において、フランチェスコ会士であったオッカムは個物を実在とし、普遍を観念の記号とすることで、普遍者の階層秩序の実在を否定し、均質な、従って無限の空間のイメージを現出させていた。オッカムはさらに進んで、個物が普遍をその本質として実現するという目的論的時間を否定し、因果の連鎖は無限にたどり得るものとしたが、それは均質な時間の流れを前提としてのことであった。オッカムの思想には、既に時間の遠近法の萌芽がみられると言ってよいが、これはこの時代のイギリスに毛織物の生産が始まったことと無関係ではないであろう。ここから産業革命に向かうイギリスにおいて、ワーズワースの詩にみた時間の遠近法が確立するからである。

Ⅲ 科学革命、産業革命と時間の遠近法

中世から近代への移行は、貨幣経済が、伝統社会をその根底において支える共同体の内部に浸透してこれを解体させてゆく過程に伴い、伝統社会の階層的秩序とその世界像から自由となり、身分において世界に帰属するのでは

なく、個として世界と向き合うという精神的態度をもった個人が登場してくることで特徴づけられる。それは中世末から18、19世紀に至る長い過程であるが、近代精神の形は、まずはルネサンス期のイタリアにおいて、前章で述べたような空間の遠近法として出現したのであり、それは世界システム間の商業の展開に伴うものであった。

空間の遠近法を可能とする精神的態度の出現により、これまで世界の一部であった個人は世界と対立することとなり、主観と客観の分裂が生じ、同時に自己の外にある無限の世界は意識の世界と一致するというパラドクスが生まれることとなる。世界は、無限で均質な空間として自己の外に広がり、自己は、まずこの世界についていかに客観的に知ることができるかの問いから出発することになるが、それはデカルトやベイコンの、自己の内にある客観性の基準としての方法の探求という形をとる。ここに内省を通しての私の自覚として、自己意識が現われるのである。

ベイコンとデカルトはしかしながら、空間の遠近法の範囲を出していない。ベイコンが帰納法によって得るとする知識は、法則とは呼んでいるが実質的には事物の概念であり、時間化されて捉えられているものではない。またデカルトは、世界の現象を物体の運動として、これを解析幾何学的に法則化して捉える道を開いたが、世界から力の要因を排除して、運動をすべて慣性の結果としたために、これを歴史的時間の中で働き続ける法則として観ることはなかったのであった。

時間の遠近法は、時間を、ニュートンが定義した絶対時間、つまりワーズワースの詩の背後にある、無限の過去から無限の未来へと均質に流れる時間として捉える精神的態度から生じる。そのような時間は、時間の外に立ってこれを計測することが可能な時間としてイメージされるからである。ニュートンは、このような時間概念を、錬金術や新プラトン主義から示唆された宇宙における力の働きを、数学的に法則化するために必要としたわけであるが、それが18世紀末にラプラスの魔神の構想に観られるような世界観を出現させたのであった。それは、時空間の遠近法の装置をもった精神は、人間の歴史を含む全宇宙の歴史を一つの法則の下に展望できる能力をもつという主張に他ならない。

時間の遠近法は、社会システムが産業化する過程と不可分に結びついて形成される精神的態度である。空間の遠近法は、既に観たように、商業活動の

展開と密接に結びついていた。商業には、異なった社会システムの間空間の距離が重要な要因をなしており、距離を客観的に測定できるような装置である空間の遠近法を生み出す精神的態度の背景となった。一方、産業社会は、時間の経過が価値の源泉として重要な意味をもつ社会であり、時間の経過を客観的に測定できるような精神的態度に基づいた時間の遠近法が、価値基準の形成に重要な役割を果たす一方で、その不断の客観化のプロセスは、あらゆる価値判断を無化し、それから自由になる方途をも提示することとなったのであった。産業革命の真中にイギリス・ロマン派や、イギリス風景画の表現が成立したのは、まさにこのことによる。

18世紀末から19世紀において、絵画史の伝統とは切り離されたところで達成されたイギリスの風景画は、ワーズワースの詩と同様、自律自足の自然の中に人工物を埋没させ、画面から人間的要素を排除する描き方を完成させたが、それは、伝統的価値から解放されると同時に、利害関係のみが支配することとなった産業社会において、利害関係から自由になって世界と向き合う精神的態度をもたらず表現であった。それは、イギリスにおける近代国家の形成の過程で、利害対立を超えた共感に基づく国民意識の醸成の根底にあるべき精神的態度であったのである。

おわりに — 世界史の展望 —

第1章で観たように、ワーズワースの詩にあるロマン主義の精神の形は、二つの遠近法が機能してもたらされたものであった。この精神の中で、空間の遠近法に伴って露呈した近代精神における自己と世界、主観と客観の対立は、自己意識の発展の法則の中に解消する方途が見いだされたのであった。

自己意識は、コウルリジによって、1817年出版の『文学的自伝』において、主観が、客観世界を客観的に構成することで、主観と客観の合一を目指す無限のプロセスとして定式化された。このことは、コウルリジが、ワーズワースと同様、時間と空間の遠近法を装置とする精神的態度を取っていたからこそ、自己意識の外に立って、自己意識の発展の法則を見出すことができたことを示しているのであり、同じ精神的態度が、同時代のドイツにおけるフィヒテの自我と非我の哲学、シェリングの自然哲学、ヘーゲルの精神哲学にお

ける弁証法なども可能とするものであることを示唆しているのである。ヘーゲルは、ここから、精神の発展の法則に基づいた世界史の哲学を展開して、初めて世界史を展望したのであった。ドイツにおいて、国民意識の醸成は、この世界史の展望の中で、世界共同体の形成と本質を同じくする、精神の発展の究極の段階に置かれることになるのであった。

ポーは、『ユリイカ』において、不十分な科学的知識を基にしながらも、20世紀のビッグバン理論と本質を同じくする宇宙史の構想をもつことができた。印象派以後の美術史、相対性理論や量子力学以後の科学史は、世界の外に立って世界を観るといふ、いわば神の立場に立つことを不可能と観て、遠近法を成立させる精神的態度に対する異議申し立てとして展開した。しかし、現代の科学が神の方程式を求める態度を取り続けているように、遠近法に対する異議申し立ての試み自体が、遠近法に基づいてなされざるを得ないということは、ロマン主義を超越しようとする試みがロマン主義であるというテーゼの正当性を立証しているのである。